

## 哀惜の念深く

久原 卷二

その日、私は君の故郷上五島にいた。君の同級生らから定年を前に「最後の授業を」と請われ、PTA研修会の講師として招かれていた。前日夜は、定年前祝いをしてくれ、二次会では例の焼鳥屋で、君の話やらで深夜まで大いに盛り上がった。

次の日、研修会を終え佐世保行き船に乗った。沖へ出たころ携帯電話が鳴った。高速船のエンジン音で聞き取れない。「佐世保湾に入ってかけ直します」と一旦切った。そろそろと思ったころ先輩からの電話、あまりの悲報にどんな反応をしたかよく覚えていない。

君との出会い、そして37年間の縁は、私の宝物である。

昭和47年4月、新任教師として、新入生の君と初めて出会った。郷土研究部の集会だった。恵まれたことに初年度から正式の部活動として認められ、部員も優秀な生徒ばかりであった。上五島地区は、考古学的に十分な調査がされていなかったこともあり、踏査するごとに新遺跡、すごい遺物を次々に発見した。特に君の力は絶大で、多くの縄文時代遺跡に加え、丸尾、江の浜、立串などの旧石器時代遺跡を見つけるまでにあまり時間がかからなかった。その年の秋、文化祭で充実した遺物展示ができるほどであった。

3年生の2月、君はある大学の合格報告に来てくれた。「その進路で後悔しないのだな」の私の確認の一言に、君の顔色が変わった。1か月後、別の大学に合格し、考古学の道へ進んだ。

高校在学中も我が家へよく遊びに来たが、大学時代もよく来てくれた。学びへの想いを語るあの瞳が懐かしい。私の子どもたちも「福田のお兄ちゃん」が大好きだった。娘の誕生日に買ってくれたおもちゃは35年前のままだ。

君の高校卒業10年後、ありがたいことに今度は同僚として席を並べることができた。私が県文化課へ異動したからである。高速道予定地の遺跡を調査することが主な仕事だった。極めて楽しく充実した3年間であった。初年度、嘱託身分のままであった君たちの勉強会を立ち上げ、昼休みや夕方採用試験対策をさせた。そのおかげもあったのか次の春見事に正式採用、他の仲間も多くが採用された。2・3年目、発掘現場で一緒に合宿生活は更に思い出深い。昼間の調査、分担してつくる夕食、毎晩の盛り上がり、学生時代のように新鮮で活気があった。作業員さんらに愛される君の姿に感動したこともよく覚えている。

その後私が学校へ戻り、また3、4年ごとに転勤することになり、君も学校へ転勤、結婚などがあり、じっくり飲み、話すことは減ったが、節目ごとに子どもさんを連れて来てくれたのは嬉しかった。再び県学芸文化課へ呼ばれ、最近はその中心として大活躍していると聞いていた。

あの悲しみの日から2年が経とうとしている。

初めての出会い、学問への道、教員としての再スタート……君の人生の岐路で関わられたのが本当に幸せである。定年して長与に戻ったら、君としょっちゅう飲めるな、こんなことあんなこと一緒にできるなと思いを巡らしていた。家内も楽しみにしていた。今となっては、もっともっとやっておけばよかったのと思うことばかりだ。卑怯だぞ先に逝くなんて。ご家族の悔しさ、悲しさに比べようもないが、私の心には大きな穴が空いている。ただ、君が遠くへ旅たったころ、故郷の地で君を肴に飲んでいただのには深い縁を感じる。最期までいい教え子だった。

心から冥福を祈る。